きっと私は、この街にいる

カツセマサヒコ

Special Short Story

「え！　じゃあ、ママとパパって町田のラーメン屋さんで出会ったの？　あの、シバヒロの近くのとこ？ まったく知らない人同士なのに？」

仲見世商店街を出てすぐのところにある喫茶店は、私よりも年齢の高い客層が大半を占めていて、私たちのような親子がいるのは珍しいように思えた。それに加えて七歳の娘は、私と夫の出会いについて大声で何度も質問してくるから、まわりのお客さんの耳は、ずっと私たちに集中している気がする。

「うんうんうんうん、そう。そうなんだけどね、恥ずかしいから、ちょっと声ちいさくしてくれる？」

そう言ってはみるものの、すっかり興奮している娘を見ると、落ち着く様子はまったくなかった。私は伝票を手に取り、店を出ようと我が子を急かす。

＊

生まれも育ちも町田市だったけれど、まさか結婚して子どもを生んでもなお、この街に住み続けるとは思わなかった。夫と出会った街だから、というのもあるけれど、それだって十五年も前の話で、当時、私たちはまだ二十歳を過ぎたばかりの学生だった。

実家の近くに美味しいラーメン屋さんがあって、その日はどうしてもその店のラーメンが食べたかったから、いや、さすがに年頃の女が一人でラーメン屋に行くのはどうかと思いつつ、食べたい時に食べたいものを食べるのが一番の幸せだと言い聞かせて、えいやと一人で、その席に座った。

そしたら、隣にいた同世代の男性が、急に話しかけてきた。いや、話しかけてきたというか、あれは、なんだ、ナンパともちょっと違う、ただ、私は割り箸の独特な風味が嫌いで、外食のときはいつも自分の箸を持ち歩くのだけれど、その箸を、突然大きな声で褒め始めたのだった。

そのラーメン屋さんはあんまり私語を良しとする空気の店ではなかったから、男性の声はやけに大きく響いたのを覚えている。そして男性は、ひとしきり箸を褒めて、自分の名前を告げたあと、ものすごい勢いで、ラーメンを食べ始めた。顔を真っ赤にして、汗だくになりながら。私はその姿に呆れるどころか、彼がアニメか漫画のキャラクターのように思えて、やけに興奮した。そして何を血迷ったのか、店の外にいた彼に声をかけて、連絡先を交換したのだった。それが、私と夫の出会いだ。

＊

「すごいね！　今度また、そのラーメン屋さんに行こうね！」

娘の旭（あさひ）が、繋いだ手をブンブンと振ってうれしそうにしている。あんなヘンテコな出会いを「すごいね」と純粋に褒めてくれるのは、何歳までなのだろうか。すっかり大きくなった一人娘のつむじを見ながら考えていると、その頭が動いて、こちらを向いた。

「じゃあさ、パパとママはさ、町田でいっぱい遊んでたの？」

「ああー、そうだね、うん。すっごいいっぱい遊んでた」

当時の二人を思い出して、思わず笑ってしまう。私たちは出会ってからというもの、若さを武器に疲れも忘れて、町田という街を全力で謳歌していた。行きつけにできそうな飲み屋をどんどん発掘する。古着屋めぐりに付き合ってもらう。入ったことのないラーメン屋さんに行ってみる。彼の好きなレコード店に行く。

古書店で買った本をカフェでいつまでも読む。小籠包を立ち食いする。広い公園をのんびり歩く。古い映画をTSUTAYAで借りる。馴染みの酒屋から美味しいお酒を選んでもらう。乾き物の専門店でツマミを仕入れる。朝までカラオケ店で過ごす。

そのほかにも、この街でありとあらゆるところに出掛けた気がする。町田は街自体がギュッとしていて、食も娯楽も憩いの場も、駅から歩ける範囲にすべて揃っているからラクだ。わざわざ都心まで足を運ぶメリットが浮かばず、そこまで勝手知った街となったからには、結婚してからも住むのが私たちにとって自然な流れだったと言える。

「いいな。私ももっと遊びたい」

七歳の娘は羨ましそうに言った。拗ねた表情をするとき、いつも夫に少し似た顔になる。

「うん、遊べばいいよ。友達ももっと増えるし、楽しいよ」

私はそう返しながら、自分の今の友達は、旭を生んでから出会った人が多いなと思う。

親になるまで気付かなかったけれど、町田には家から遠い保育園に送り迎えしてくれるバスがあったり、かなり立派な雨の日でも遊べる児童館があったりと、子育て中には嬉しいことが沢山ある。駅から徒歩で行ける芹ヶ谷公園には小川が流れていて、ザリガニがよく釣れるし、夏場になれば、水遊びができる噴水広場もある。町田市外からの来場者も多いリス園は旭も大好きだし、子連れで遊び場に困ることは、ほとんどない。

育児は両親だけでできるものではないと考えていた私にとって、街自体に子どもを大切にする空気が流れているのは有り難いことだったし、旭を通じて出会った友人たち（ママ友、という言葉自体はあまり好きじゃないけれど、つまりはそういう関係かもしれない）と雑談をしていても、生活を豊かにすることに真摯に向き合っている人が多くて、共感が持てた。

若い頃には気付かなかった街の良さが、歳を重ねることで見えてくる。そうして同じ街を何度でも味わい直せるから、一つの街に長く住むことは、おもしろい。だからたぶん、この先何年経っても、きっと私は、この街にいる。

「あ、パパだ！」

小田急線のフミキリ脇にいた夫の姿を見て、旭が声を上げた。夫は手を大きく広げて、旭を受け入れる。

「お待たせお待たせ。ねえ、なんか腹減っちゃった。ラーメン食べに行かない？」

「わ、行きたい！　パパ、私、行きたいラーメン屋さんある！」

私たちは、この街で今日も、暮らしてる。

カツセマサヒコ

1986年東京都生まれ。大学卒業後、一般企業に就職。趣味で書いていたブログを機に編集者・ライターに転職し、SNSで人気を博す。2017年に独立し、2020年、小説家デビュー作の『明け方の若者たち』（幻冬舎）を刊行。町田市在住。
@katsuse_m

WEBサイトで掲載中！

『きっと私は、この街にいる』の前編
『駅徒歩21分のまほろ』

子どもセンター まあち

0歳から18歳までの子どもが自由に遊んだり、勉強や読書、なんでもできる大型の児童館が市内には6か所ある。町田駅からいちばん近いのが「まあち」。

つながり送迎保育園・もりの

子どもの預け先と自宅、勤め先が離れている、希望の預け時間が合わないなどの悩みを解消するために、一時預かりと送迎を担ってくれる保育施設。

町田リス園

町田といえばリス園と言われるくらい、知名度抜群。約200匹のタイワンリスが放し飼いされ、リスにひまわりの種をあげることができる。